
わからない事だらけだけど

ヤー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わからない事だらけだけど

【Nコード】

N4279X

【作者名】

ヤー

【あらすじ】

高校生の長井は、ある夜に幼馴染みの田井中が人を切り分け土に埋める所を目撃する。

その狂気に満ちた表情とその行動は、彼の心を締め付けた。

そして彼は思い悩んだ末に、彼女と話をしてみようと立ち上がる。

始まりー

目が覚める。

カーテンは数年閉じたまま開かれず、暗い雰囲気が立ち込めていた。テレビ昨日からつけっぱなし、画面では節操なく働く繁華街の様子をアナウンサーがインタビューと銘打って質問をぶつけている。

俺は黙って電源ボタンを押し、ソファから立ち上がる。

エロ本やコーヒーの缶、そしてぐちゃぐちゃの新聞紙が散らかる部屋を何の抵抗感もなく歩く。

足元のごみを蹴り、洗面台に向かう。

ここは比較のごみが少ないがいろんな所にほこりが乗っている。綺麗とはいえない。

手短なタオルで汚れた鏡を拭いた。そこに映るのは自分の顔。髭やくまが酷い。何より疲労感が顔から滲みでている。

「俺は・・・」

昨日から学校は行っていない。確かに行けば変わるかも知れない。変わるかも知れないが、現状打破は出るかも知れない。

俺は蛇口をひねって水をだす。

両手で器を作り、顔に浴びせる。

行こう、学校に。今を変えるために。

意を決した俺は表情を締めなおす

狂気いー

友達とのカラオケ祭りからの暗い帰り道を歩いていた。

時間は日にちが変わった12時15分。歩く道は人通りの少なく、街灯が途切れ途切れに点滅を繰り返していた。

俺はペットボトルに入ったぬるいコーラを飲みつつ、お巡りさんを警戒していた。何せ今は制服のままであり、見つかると補導されるかも知れないからだ。

まあ・・・この道自体、迷路のようにいりくんでいるから撒くのは簡単だけど。

野球部さながらのエナメルバックを揺らしながら歩く。

すると、家と車道に囲まれた小さい公園が見えてきた。

青いペンキの塗られた滑り台、鉄の鎖で繋がれたブランコ、砂場、コンクリートの塗装が剥けている目がでかい楕円形の可愛い蛙の像。すべてが夢と共に色褪せ、塗装が剥けていた。

思い起こす友達との思い出。

（あの頃が一番楽しかったのかも知れない・・・）

気持ちは初老だが、今は高校生。先を急ごうと足を進めた。

その時だ。

砂場到人影が揺らいで、何か堅いものをノコギリで切り分ける音が響いた。

「あ。音だしちゃった。」

声もする。女の子の声だ。

「まいいか。誰もいないしね。」

周りを見回して言った。

イヤイヤ俺いますやん。と思いつつ電柱の影に隠れていた。

途切れた音が今度は連続して繋がった。

ギコギコギコギコギコギコ．．．バキ！．．．ギコギコ
ギコギコギコギコギコ．．．バキ！．．．ギコギコギコギコギ
コギコギコ．．

ノコギリが何かを削り、折れる音。

しばらくすると、鉄臭い臭いも漂ってきた。

不穏な雰囲気と現実味の湧かない恐怖は吐き気を催して、それを必死に堪えながら、道を変えようと公園に背を向けた。

（何か知らないけど、あんなマッドサイエンティスト染みた事みてらんねーよ！）

そそくさと逃げようと歩を進めると、背後に気配を感じた。動物などではなく、人間独特の雰囲気。

「．．．がいくん？」

か細い声がしつかりと耳に届いて、汗が瞬く間に引いていく。俺は恐る恐る振り向いた。

俺と公園の間には街灯がある。その街灯が照らす明るい光の枠組みの外に、断片的なパーツがシルエットとして浮かんでいる。勿論それだけではどんな姿なのかはわからない。

だが、何故か俺の頭にはある人物の顔が浮かんでいた。俺は知っている。

その声。その呼び方。俺はこいつを知っている。

恐怖に震えながら、もっと別の感情が沸き上がる。間違いであつてくれ。そう願った。

震えた声で、名前を呼ぶ。

「田井中？」

名前を呼ばれるのを待っていたかのように、ソイツは街灯の下に現れた。

細い眉。細い首。白い肌。茶色の目を大きく見開き、ハーフのような顔立ちは驚きの表情を作っている。田井中もまた制服のままだった。

そして何よりも右手にはノコギリをしっかりと握って、全身は血で赤く染まっていた。

「何．．．してんの？」

彼女は驚きからいつもの笑顔になって、手に持っていたノコギリを俺に見せた。

「解体！」

あっけらかんと言いはなった。

学校。

吹き上がった汗と、寝起き特有の体の暖かさが今まで寝ていた事を自覚させた。

息も切れ切れに顔を上げて辺りを見ると、先生の黒板に書く古文を、生徒らがノートに移しているようだった。

俺は学校に来ていた。

そうだ。思い出した。俺は、あいつにあの時の事を聞くために学校に来たんだ。ほんとうに人間を解体していたのかを、確かめるために。

「今は国語の時間だよ。」

記憶をたどっていると後ろの席から声がした。反射的に体がビクッと震える。

「・・・大丈夫？風邪でも引いたの？」

俺は後ろの奴に返事をした。

「あ、ああ、悪い。ちよつとな。」

悟られては行けないいつもの調子を装った。誰にもわかるわけないのに。

・・・だが今になって考えてみれば、ほんと現実味が薄い。

容姿端麗。性格も、人間関係も、成績も、困る所がない所が困る所のような完璧超人が、人を殺し解体した。誰も信じないし疑わないと思う。

とは言うが、現実が起こってしまったのだから仕方がない。そう、だから俺は彼女に自主して欲しい。俺をいつも助けてくれたように、彼女を助けたい。

ふと机には二枚の古文の問題がかかっている紙が置いていた。

「悪い。一枚多くないか？」

肩をこづいてプリントを一枚差し出した。振り向くと迷惑そうなに眉を寄せて、当たり前のように言った。

「綾瀬さんいるじゃん。」

は。

心臓の鼓動が一層際立った。

「ねえ、プリントは？」

後ろにゆっくりと目だけ動かしした。

そこには手にもったザラ紙のプリントを待つ、田井中の笑顔があった。

口の端が勝手に歪む。笑いが込み上げる。絶望の色が脳を支配して、汗と恐怖心を造る。

「おはよ。長井くん。」

いつもの笑顔は、いつもののではない。そんな気がした。

世界。

放課後を知らせるチャイムが、夕闇の空に遠く響いてくる。河川敷を歩きながら、そのチャイムを背に帰路を歩いている。

通り行く人は笑顔で、その中には俺へと挨拶をしてくる老婦人に頭を下げながら、考え事をしていた。

この日本は、50年前。一度パンデミックが起きた。

感染力の強い未知のウイルスが世界を包んだ時、外交や貿易が盛んな日本はそのウイルスの影響を押さえる事ができず、一手に受けてしまったらしい。

ウイルスの症状は”無意識の殺人”。性格や体調に何らの変化はなく、気付くと人を殺しているというもの。

そのウイルス、「ゴースト」という名前だが、発生原因がわからない為に日本国民の殆どにワクチンが投与された。このワクチンは国民の四大義務としても加えら、そのウイルスに死の果てがないと言う事がテレビで流された。

とは言うものの、50も前の話で俺には実感がわかない。

だがもし、田井中がそのワクチンを受けていないのだとしたら・・・

地面に転がる石を蹴りながらそんな事を考えていると、勢い余ったその石は坂に落ちて、川へと転がって行った。

「あ・・・」

川辺に向かつて転がる石は、その場に一人佇んでいた女の足元で静止した。

謝ろうと声をかけようとしたが、視界が女の顔を捉えると、恐怖が喉を締めた。

それは田井中だった。

驚きと恐怖で背筋が冷たく感じて、顔が固まった。

田井中は寂しげな眼差しを川へと向けて、長く綺麗な髪をなびかせながら笑っている。

その笑顔は昔のままだ。なのに何故だ。何故お前が人を殺した。昔のお前は優しく、虫も殺せなかったのに。．．．それも、ウィルス性の性なのか？

田井中の背中を見ながらばれないように、忍び足でその場から逃げた。

その日、田井中は俺に気付く事はなかったけど、俺は気づいた。彼女の心は、闇に埋もれているのではと。

接近。

午後6時。俺は部屋に籠ってベッドに横たわっている。下の台所からトントントンとリズムカルな音が聞こえて、ジャガイモとニンジン煮を煮たような匂いがした。母が肉じゃがを作っているようだ。

隣部屋では妹と妹の彼氏が愛を囁き合っているようだ。

壁越して聞こえにくいけど、「誰よりも愛してる。」とか「愛があれば地球なんていらない」とか、中学生にしてはくどい事を言っている。こつちからすれば齒が浮くようで居心地が非常に悪い。

「死ぬ！！お前らが地球いらなくても、俺はいるんだよ！！爆発しろ！！」

力限り心の中で叫んだ。

やりきれない気持ちが混み上がってくる。どす黒い何が頭を包む。特に理由もなく、おもむろに携帯を開いた。着信履歴が一つだけあった。

番号登録のされていない物で、市街地局番が頭についてる。つまりは固定電話からの着信と言う事。

「誰だ・・・」

考えたくはないが、田井中とは親い関係だったので固定電話の番号は登録してある。

つまりは友人関係か・・・それとも間違い電話か。

スルーしようとも思ったが、何故かかけ返してしまった。

通話ボタンを押した後で少しばかり怖くなったが、どうやら恐いもの見たさは人一倍のようだ。

「【現在、この電話番号は使われておりません。番号ご確認の上・・・

返事は予想外にも留守番電話サービスのお姉さんのお声。しかし、脱ぐいきれないのは、このお言葉だ。

??

電話が使われていない。通話中ではなく、繋がらない？俺は眉をひそめる。

【現在こ．．．でん．．．こ．．．】

突然ノイズが走り、優しいお姉さんの言葉が途切れ途切れになる。そしてそのノイズは波のように声を遮って次第に大きくなり

【ザー．．．】

完全に飲み込んでしまった。

俺は気味が悪いので携帯を閉じて、電源を切った。

なんだろう。もしかすると、幽霊でもかけてきたのかも知れない。非科学大嫌いな俺がそんな事を真面目に考えてしまった。

「カレー出来たよー」

母の声が聞こえた。

まあ、もうそうそうないだろうよ。考える事を放棄するように、携帯をベッドに放り投げた。

三日。

三時間目、黒板の上部の僅なスペースに立て掛けた正四角形の時計を見た。後20分も経たずにチャイムがなる。

教室の雰囲気は先生という抑圧的な存在がない為、友達同士で喋ったりなどもう殆ど休み時間に近い。

俺もそれにあやかっで、机に項垂れながら携帯を開いていた。

着信履歴と書かれたアイコンにカーソルを合わせて、決定ボタンを押した。

上から順に最近の番号や名前が表示される。俺は三日前から電話などに使っていないので、必然的にあの番号がでてくるのだ。

ジーっと画面を見つめる

これはなんなのだろう。基本的にはつながらい　ところからかけられないし、かからない。

馬鹿でも分かる単純な事が、今の俺には分からない。

理論や考えの答えは異なる真実で崩れる。子供の頃に、おじいちゃんが俺の頭に手を添えて言っていた。

意識が飛んでいたようで、頭に重みで沈んだ事によって視界が戻った。

暖かく軽く柔らかい感触が頭頂部を覆っている。心地よく、心が落ち着く。

「長井くん。考え事ですか？」

聞きなれた声がする。

視線を左に動かすと、そこにはウェーブのかかった長い茶髪が垂れ

ていた。そのまま上へと目を動かす。優しい柔和な笑顔の眩しい前野さんが俺を慈悲深く見ていた。

「ここ最近、虚ろな顔をなされていますね。」

どうやら俺の事が心配らしい。頭に置かれてるであろう手が動き出す。撫でられるのは嫌いじゃない。

「あつたけど、前野さんが撫でてくれるので無くなりました。」

「フフ．．．そうですか」

優しい笑顔が俺の心を洗い流し、柔らかな光が俺を包む。

その笑顔のまま唐突に

「嘘ですね。」

と言った。

「さあ話して下さい。長井くんの胸の内を．．．」

疑問。

昼休み。俺と前野さんは屋上にいた。

屋上は生徒の利用が許されているので、昼休みに限り解放されている。その為、屋上の一角に自販機と赤いベンチが解放されている。

ベンチに腰をかけて、缶コーヒーを一口あおる。口をはなすと重みが消えた。中身がなくなったらしき缶を手前のゴミ箱に投げ入れた。横で座っている前野さんは、俺の携帯をもって画面を睨んでいた。

彼女には昨日の事を話した。

笑ったまま相づちをうつて再度かけたりしてみせた。結果は同じだった。

「本当に不思議ですねえ・・・」

眉間にシワがよって呟いた。

「どこの県でもないですし、外国でもなさそうです。ましてや使われていないのに掛かってくるのも可笑しな話。」

”いたずら”だけでは説明出来ないと云うことだろう。

「まあこういう事もあるのでしょう・・・」

「はあ。」

落胆。前野さんは息を吐いた。

昼休みは終了。お互い別れを言って教室へ帰っていった。
何もわからないのは、本当に嫌だ。

悪夢。

「……」

暗い教室。窓から差し込む月明かりが唯一の光だ。

誰もいない。いるはずがない教室に俺はいた。隅っこで、うずくまっていた。

何故だ。何故学校にいる。何故うずくまっている。

体を動かそうとするが全く動かない。しかし、体は小刻みに震えている。まるでコントローラーのないFPSゲームだ。

「長井くん」

聞き覚えのない声。鋭くヌメヌメしたその声は廊下を木霊している。その声がスイッチを押したかのように、体の震えが一層高まった。首がかってに教室のドアの方向へと向く。

人影がくつきり、浮き上がっていた。

「長井くん」

正体不明。誰かもわからない人影は、俺の名前を呼ぶ。

「長井くん」

やめてくれ。俺はお前を知らない。知らないんだ。

「アソボオ……」

深く深呼吸をする。

肺に空気をためて、口ではきだした。

額の汗を拭って、服を脱いだ。目覚まし時計を見ると、時刻は深夜2時を指している。

「悪夢……」

新しい寝具のカッターシャツを羽織りながら呟いた。

単純な直感が出した言葉がそれだった。だが
それではしっくりこない気がする。

ボタンを最後まで着けて、また布団に戻った。もう二度とあんな夢、
みませんように……

夢

ではない

これは未来

この世界の

お前は

生き残れるか？

唐突に頭の中に響く。誰だ???その言葉が出る前に、睡魔が襲ってきた。

動く、変わる未来へ

深夜の2時を回った頃。コンビニの駐車場には、夜の暗闇に溶けるような黒いワゴン車が一台だけ止まっている。

トレンチコートを深々と羽織った髭の濃い男は、缶コーヒーの飲み口にタバコを落とした。ジュッと火が水によって消される音を確認し、ゴミ箱へ投げ入れた。

そのまま遅い足取りで、黒いワゴン車の後部座席に乗り込んだ。

「今日だ。」

後部座席とは名ばかりで。中は座椅子を取り、広々としたスペースに改良してあり。そのスペースに無線機の類いやらパソコンやらをめちゃくちゃにほりこんであつた。

男は手前に置いている、警察が使っているタイプの無線機だ。そのマイクから声がしている。

「現在！西区方面に逃亡中の女子高生を追走中！特徴は○×高校の制服をきた長髪！錯乱状態の為、応援要請する！どうぞ！」

男はマイクをかけ直した。

「彼女も動いている……となれば奴を追いかけていると見るべき。」

頬杖をついて考える。

「彼女が言う未来は、丁度2時間後。」
髭を擦り、口元を曲げる。

「本当に見れるのか……未来の変更点を。」

警察のサイレンがあちらこちらから聞こえる。背後からは足音と警官の声

「まちなさーい！」

「はあはあ……」

動機に呼吸 が追いつかない。脇腹に鈍い痛み。でも止まらない。

「前野さん！」

さっき、唐突に前野さんから電話が掛かってきた。「助けて！学校にいるんだけど、誰かに追いかけて」

と。気づくと一心不乱に学校へ向かっていた。

もちろんこの鳴り響いたサイレンは俺をおっているものではけしない。ただ、補導をする警官に構ってる余裕もない。

なので絶賛逃亡中だ。

「また助けてやる。何回だって！」

脳裏に昔話が沸いてきた。

恐怖

「前野さん!!」

教室の戸を勢いよく開いた。

俺の声が静かな学校にこだまして消える。月明かりが教室を青白く照らしていた。とりあえず見渡して確認する。

誰もいない。

それはそうだ。前野さんは電話で居場所を伝えていない。ここに来たのは殆ど勘だ。

もう一度青白い教室を見渡して、手前の座席に座って考える。

まず、何故学校の校門は開いていたのか。これは前野さんが学校に逃げてきたからだ。本人が言っていたので間違いない……

……違うな。違う違う違う。

考えたら最初からおかしかった。

うちの校門は鉄製の牢屋チックな重い扉。そこには大きく太い黄金色のキーロック式の上鍵が着けてある。それが何らかの間違いで開いていたとしても、校内の鍵があくはずもなく教室には入れない。

仮に飛び越えたとしたら、セコ。の強いお兄さん達が召喚されるはず。

無用心極まりない。まるで入ってくれと言わんばかりだ。

瞬間、背筋に冷たい感覚が走った。

勢いよく立ち上がり振り向く。なにもない。見回しても変わりがない。ただ雰囲気重くなったように感じる。

俺は何かにかられるように、急いで教室をでようとした。

「がいくーん．．．」

気持ちの悪いヌメヌメした声が聞こえる。

思い出した。さっきから何か見覚えがあるとおもったら、これ夢でみたじゃないか。

慌てて戸を閉めて、教室の隅に逃げた。．．．ああここも一緒。

確変。

又メ又メした気持ちの悪い声がする。
足音が聞こえる。

結局、夢と同じ状況だ。教室の隅っこで蹲って、廊下から近づいてくる足音に恐怖してる。震えてる。

震えまいと心に言い聞かせても、見えない夢の先を思う度に泣き出したい衝動が邪魔をする。

殺される。

まだあの電話の事も田井中の事も終わってない。何も解決してない。

やりたい事やってない事で頭でいっぱいになる。

コツ．．．コツ．．．

足音が止まった。

吐き気が喉を通りそうになって、それごと息を呑む。

「長井くん。」

はっ！とある事に気がついた。

声が途中から変わっている。いつからかわからないが、この声は違う。

俺は振り返って、ゆっくり開く戸を眺めていた。何故か誰が出てくるのかが予測がついた。

「田井中．．．」

彼女はにっこりと笑っていた。

だが今の彼女はとても清楚とは言えない。制服は誰かと乱闘をしていたのか、ビリビリと右肩から右袖の部分がちぎれて白い腕が露になっている。

そして左手に何か大きい球体を糸に吊るして握っていた。

「よかった。」

また、誰かを殺したのだろうか？その事がわからなくても殺す理由はだいたい把握した。

「俺の為に殺したのか．．．人を。」

「うん。」

笑顔の即答。

「私ね。この人殺すの20回目なの？」

そして電波発言。むかしから謎の多い子だ。

「それが何故かなんて、今のあなたにわかる訳ないよね。」

悲しそうに言った。田井中は俺をじっと見据えて、少しだけ息を吐いた。

俺はその光景を何故か、一度見たんじゃないかと感じた。

「付き合って」「付き合って」

「え．．．．．」

「あ！ごめん！何か口からでちゃって．．．」

唇を動かしたつもりが声にしまった。恥ずかし過ぎて身悶えしている俺を、田井中は驚きの表情を向けていた。

「覚え．．．．．てるの．．．」

声が震えている。

「いや、あの、記憶とか確信できないけど、なんとなくっていうか．．．デジャブっぽいんだけど．．．」

言い表しにくいけど、頑張って伝えてみた。

彼女の目がちよつとずつ和らいで、潤んで、そしてなきだした。

「え！なんで泣くの？」

彼女は俺の胸に飛び込んだ。

柔らかな感触と、甘い匂いが登ってきた。何だろう、初めてのよう

な感じがした。この瞬間をまっついて、待ち焦がれていた。そんな感じが。

「私は！あなたの記憶にない私がいて！やっとあえた．．．」

「あのちよつと．．．」

「時間が変わる度、あなたの記憶はなくなつて．．．私は一人になる。いまとなりにいる人が、全然ちがつたり一緒だつたり。」

「なんだか彼女の言つてる事がわからない。わからなくても心が感じている。彼女の途方もない何かの感情。」

「私は．．．いつも一人で！！」

彼女はその後、4時まで泣き続けた。俺の胸で、それをゆっくり抱き締めた。

確変2。

「大丈夫？」

田井中は俺の胸の中で、黙って頷いた。

「そか。とりあえずここを出ないか？」

「・・・うん。」

ゆっくりと離れて立ち上がり、俺に視線を向けて手を差しだした。

目元が赤く腫れた、まだ息も整っていない彼女は何故か笑っていた。

彼女の白い笑顔に俺は少し見とれていた。

彼女は、俺が手を握りかえすのをただ待っている。

「帰ろう・・・」

俺は握りかえした。その瞬間、彼女は俺の手を勢いよく引っ張った。

「ごめん。」

視界は暗くなった。

私はやってしまった。時間軸が狂ってしまう程の間違いを。だが、この世界は今までにない変化が生まれた。

今私がおんぶしている眠った長井くんが、先に言った事が事実なら、

可能性はある。ついに終われる。

ならむしろ、全てを隠さなければならない。深みに入れてはならない。

肩から垂れる長井くんの腕に頬を寄せた。

「私がやってあげる。全て。全ては終わった時に。」

いとおしくも狂おしいこの感情が私の原動力だと思っている。この原動力は、同情で消えてしまう火。

時間の放浪者は孤独。先の長井くんから聞いた言葉だ。

私は長井を背負って夜道に消えて言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4279x/>

わからない事だらけだけど

2011年11月21日11時35分発行